

セルロイドの塔

今から 66 年前の 1945 (昭和 20) 年 9 月、東京日比谷の第一生命ビル内に連合国軍最高司令官総司令部 (GHQ) が横浜から移り、マッカーサー元帥の日本占領が始まりました。占領は、昭和 26 年 10 月のサンフランシスコ対日講和条約締結、翌年 4 月発効まで続きました

この 6 年余は、日本の民主化が進みましたが、庶民の暮らしはどん底の状況でした。こんな世相のなかに「セルロイドの塔」というタイトルの長編小説が書かれました。

「セルロイドの塔」(著者・三浦朱門 1926(大正 15)年 1 月生まれ)
三浦は、某大学在職中の昭和 24 年前後のことを小説にして、昭和 29 年 6 月の「新潮」に発表しました。

主人公・明倫大学教師の岡田が、ある私立大学の実体の一コマを語っています。

「セルロイドの塔」ストーリー

岡田は大学院の博士課程の最終年限を終り、論文も提出するばかりになった時、父の紹介状を貰って、明倫大学創立者の長山博士を訪問した。

「履歴書は持ってまいりましたが、成績証明書や、発表した論文などは持って来ませんでしたが。」

「そういう物はなくてもいい。お父上からの手紙に君が大学院を終えたということがあった。それだけでよろしい。」

そこへ老婦人がお茶をもってきてくれた。

「家内だ。こちらは岡田健一氏のご子息。」

間もなく岡田のところに、辞令と新学期の時間表が送られて来て、彼はずるずると、明倫大学の講師になった。

岡田が明倫に就職してから 2 ヶ月後に、長山博士は亡くなった。

どこの学校にも、その学校特有の用語があって、新入生がそれに通曉すると、一人前の一年生として通用するのだ。旧制の高校でやっていた歓迎ストームというのは、この種の校風みたいなものの伝授を象徴化したものであろう。

たとえば、岡田は自分の勤めている明倫大学の学生がよく「ケイジ」という言葉を遣

うのに気付いた。

この学校は、故長山博士が昭和の初期に作ったものだった。中学をでただけで、下級事務員をしている青年をあつめて、彼らに専門学校卒の資格と中学教員の免状を与える学校だった。

とにかく、数年も経たないうちに、この学校は間借りをやめて、独立し、郊外に校舎を建てることができた。戦後は大学にまで昇格したのである。

当局は大学昇格と同時に、仏文、社会、新聞学科を増設して、教員以外の職種にも卒業生を送りこもうと努めていたが、新設学科と、戦前からの学科には、微妙な雰囲気の違いがあった。

明倫大学には岡田と同じ大学の先輩の松下教授がいて同僚になった。

北村教授の名前は、北村が評論家兼、フランス文学者として有名だったので、学生時代から知っていた。しかし北村がこの大学の教授だったとは想像できなかった。

初対面の時、岡田が率直にそう言うと、北村は、

「世過ぎのためには仕方がないですよ」と頭を掻きながら言った。

北村は長山博士の末娘と結婚する時、明倫大学の教員になるという条件をつけられたのだという。老博士にして見れば、まだ海の物とも山の物ともつかない、文学青年に娘を託す気になれなかったのであろう。

しかし北村は文筆活動をする場合、明らかに教員をしていることをかくしていた。明倫という教員養成の三流大学を恥じていたのかもしれない。

—以下、主に次のことなどを書いている— 仏文科、社会科の教師および事務職員たちとの葛藤、派閥のスパイ、チョンガー倶楽部、学生自治委員会、学生大会、明倫大学青年学会、社会科学研究会、実力者・南理事の娘節子との関係、教職員ピクニック。

*

著者・三浦朱門には小説・随筆・評論・翻訳・共編著など 150 以上の著作があります。役職も多く第7代文化庁長官もつとめました。妻は作家・曾野綾子。

三浦は東京府立第2中学校(現都立立川高等学校)から旧制高知高等学校(現・高知大学)を経て東京大学文学部言語学科を卒業、大学院に進みました。高知は三浦の実父の故郷。

第二次大戦終結まで、日本国内には東京帝国大学のほかに5つの官立帝国大学と海外に台北と京城にも帝国大学と称する総合大学がありました。

帝国大学の予科として、一高、二高、三高から鹿児島島の七高までのナンバースクールと

東京、浦和、山形、弘前、新潟、松江、高知など主要都市に官立の高等学校がありました。

このころの帝国大学を「象牙の塔」と呼んでいました。

「象牙の塔」を辞書では、
俗世間をはなれてもっぱら学問や芸術を楽しむ、静寂・孤高な境地。特に、学者などが世間と没交渉に現実逃避的な態度で送る学究生活の世界、あるいは大学など、閉鎖的なアカデミズの世界をいう。(学者などが現実を知らないことへの皮肉や軽蔑の意をもふくむ)と解釈しています。

昭和 24 年、GHQ 指令による 6・3・制の学制改革が行われました。旧高等学校、師範学校、農、理、工、医、径の専門学校を都道府県ごとに合併させて 4 年制大学が設置されました。

学制改革の結果、駅弁大学といわれるほど大学が多くなり、教師が不足し旧制高校、専門学校の教師が、大学の講師、助教授、教授に昇格しました。

ですが新設の大学の大半は、設備も少なく校舎や敷地内に米軍爆撃の傷跡が生々しく残っていて、とても「セルロイドの塔」とさえも呼べないような状態でした。

昭和 25 年 6 月、朝鮮戦争が勃発して進駐軍は韓国に移動しました。この当時は、まだまだ日本人の多くが住宅も就職口もなく食料難に喘いでいました。

朝鮮戦争が勃発するとすぐ、GHQ から警察予備隊（今の自衛隊）編成の指令が日本政府に出ました。幹部候補募集に「セルロイドの塔」の学生のなかにも、応募した者が多数おりました。

＊ ＊

三浦朱門は「象牙の塔」に対して、小説とはいえ三流大学を文字って「セルロイドの塔」という新語をどうして考えたのでしょうか。それは三浦がビリヤード遊戯に凝っていたからだ、と想像してみました。

『『ビリヤードの当初の球は、象牙を丸く削ったものだった。象牙を得るために沢山の像と人が犠牲になっていた。象牙に代わるセルロイドが発明されて、セルロイドを材料にしたビリヤード球が量産されるようになった』と三浦先生が学生に話していた』

＊ ＊ ＊

- (1) 現物の象牙とセルロイドの関係について、セルロイド・サロンの 77 回、86 回に書いてあります
- (2) むかし「セルロイドの塔」と言われたと大学は、60 年経った今では名実ともに一流大学になっています。